

序 文

本『名古屋大学哲学論集』は、金山弥平先生ご退職記念号である。

先生は、昭和30年3月25日に島根県に生まれ、昭和52年3月京都大学文学部哲学専攻西洋哲学史（古代）を卒業し、同54年3月京都大学大学院文学研究科哲学専攻西洋哲学史（古代）修士課程を修了、同55年4月に京都大学大学院文学研究科哲学専攻西洋哲学史（古代）博士後期課程に編入学し、同58年から60年ケンブリッジ大学大学院古典学部にて2年間留学、同61年3月京都大学大学院文学研究科博士後期課程を研究指導認定退学し、その後、京都大学文学部研修員、日本学術振興会特別研究員（京都大学文学部）、京都大学文学部助手を経て、平成4年4月名古屋大学文学部助教授に就任、平成12年4月同大学大学院文学研究科教授、平成29年4月同大学大学院人文学研究科教授となり、本学に28年にわたり在職し、令和2年3月にご定年を迎えられた。

この間、先生は、西洋古代哲学の教育・研究に努め、文学研究科進路問題対策委員会委員長や人文学研究科図書・論集委員会委員長、さらに全学委員としては、学生相談総合センター運営委員、学生生活委員会委員、教養教育院統括会議委員（兼任および人文学部門長専任）として、名古屋大学大学院文学研究科・人文学研究科の運営に多大な貢献をしてきた。

研究・教育面において、先生は特に認識論・方法論を中心にソクラテス、プラトン、アリストテレスといった古代哲学の研究と教育を行ない、日本における古代ギリシア哲学界の重鎮として当該学界を牽引するとともに、名古屋大学大学院文学研究科・人文学研究科の哲学教育の水準や、長年非常勤講師として関わった京都大学大学院文学研究科の研究水準を上げることに貢献してきた。またそればかりではなく、国際プラトン学会などを通じて、世界におけるプラトン研究に対しても多大な貢献をしてきた。

特にその業績は、*Oxford Studies in Ancient Philosophy* 掲載の二本の大部な論文（1987年の『テアイテトス』関係論文：‘Perceiving, Considering, and Attaining Being (*Theaetetus* 184-6)’, 52頁、2000年の『パイドン』関係論文：‘The Methodology of the Second Voyage and the Proof of the Soul’s Indestructibility in Plato’s *Phaedo*’, 60頁）にきわめて洗練されたかたちで結晶化されている。また、先生は近年にいたっても、M.D. Boeri, J. Mittelmann と共編著の *Soul and Mind in Greek Thought. Psychological Issues in Plato and*

Aristotle (Springer, 2018)、および同書中の論文‘Plato’s Wax Tablet’、中国古代と西洋古代の比較を行なう *Cultivating a Good Life in Early Chinese and Ancient Greek Philosophy: Perspectives and Reverberations* (Bloomsbury, 2018)所収の論文、あるいは中国の国際的学術雑誌 *Frontiers of Philosophy in China* (2019)に掲載された、ソクラテスの最後の言葉の謎に挑んだ論文 ‘Socrates’ Humaneness: What Socrates’ Last Words Meant’等を発表するなど多産な研究活動を継続しているが、それらの諸論文は、ソクラテス、プラトン哲学関連の前出2論文とともに国際的にも高い評価を受けている。

他方、先生は翻訳を通して日本のヘレニズム哲学研究において指導的役割を果たしてきた。たとえば、ヘレニズム哲学の最重要の基本二次文献である A.A. ロング『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懐疑派』(京都大学学術出版会刊)と J. アナス、J. バーンズ『古代懐疑主義入門—判断保留の十の方式』(岩波文庫、岩波書店)の翻訳は同哲学の魅力を一般読者にさえ伝えるものである。さらには古代ギリシア語からの翻訳である、古代懐疑主義者セクストス・エンペイリコスの全著作翻訳(京都大学学術出版会から出版された金山万里子との共訳全4冊)は、翻訳の精度と、その解説や訳注に見られる研究的水準の高さにおいて画期的な業績と呼びうるものである。

また、先生は、日本哲学界において長年に亘って期待されてきた文献学的な批判に耐えうるアリストテレスの著作の翻訳というプロジェクトに取り組み、岩波書店刊行の『新版 アリストテレス全集』第5巻所収の「生成と消滅について」を古代ギリシア語から翻訳している。先生の古典語からの翻訳は、古代ギリシア語で書かれた注釈本や英仏独の各国語での研究書、ないしは幾種類もの現代語訳書の比較検討をなした上で行われており、それ自体が独自の研究業績として評価されるべきものである。

また、学会活動としては、先生は長年にわたり、日本西洋古典学会の委員・編集委員・常任委員、日本哲学会の委員・編集委員・編集委員長・評議員・理事、関西哲学会の委員・編集委員、中部哲学会の幹事・委員・編集委員・委員長、名古屋大学哲学会の委員・委員長などの重責を歴任している。加えて、先生は名古屋大学出版会の理事として学術出版事業にも貢献し、同出版会の理事長も務められた。

以上のように、先生は、名古屋大学における哲学研究と教育、各種の学術関連組織運営、ひいては日本の研究・教育の発展そのものに力を尽くされてきた。

さて以上は先生のご業績であるが、その具体的な内容に関して私が詳しくご紹介する能力を持っているわけでもないのので、蛇足となるのを覚悟で若干個人的な思いを綴

らせて頂きたい。

先生は、藤沢汎夫門下の秀才であるが、私が先生と出会った学生時代の印象では、先生は眉目清秀の好青年であった。私は「純哲」と呼ばれる教室で、先生とは講座が違い、残念ながら個人的にお話する機会がなかったのだが、日頃からそのご活躍を仰ぎ見ていた。藤沢門下は、多士済々だったが、特に先生は優秀な門下生として印象深かった。私の淡い記憶だと、何かの研究会でご発表をお聞きしたことがあったと思う。「魂の不死」についてか、想起説についてか、なにか思考が柔軟で、温かいお心の人だという印象が残っている。なにしろ、古代哲学や中世哲学は、古典語の習得が大変で、生来の怠け者の私などはとても敷居が高く、近付けなかった。もっぱら *Husserliana* の読破が目標の学生であった。

私自身は、その後、就職で先生と再びお近づきになることができたが、先生とお話するたびに自分自身がなにか「狷介」な人間であることをつくづく思い知らされることになった。

先生は、最近、ソクラテスの最後の言葉の謎に挑まれている。そして、一つの解釈を提示された。私から見ると、まさに先生のお人柄がにじみ出ている見解であることに驚いたとともに、納得もした。その最後の言葉というのは、「クリトン、アスクレピオスに鶏を一羽おそなえしなければならなかった。その責を果たしてくれ。きっと忘れないように」というものであった。それは、先生の解釈では、自分が死ぬことで困り果てるだろう妻(例の悪妻)や、当時深刻な病に陥っていたプラトンの身を案じて、医療の神であるアスクレピオスへのお供えを頼んでいるというものだ。そのようなソクラテスの気持ちを先生は、*Humaneness* と表現した。しかも、それは孔子のいう「仁」に通じると言う。つまり、「他者に対する真心」である。自分が死に直面して、まさに他者の身を案ずるという真心が表れているという。

先生の日頃のお姿に接したことがあるものは皆、ソクラテスの最後の言葉をそのように解釈する先生のご見解に納得できるのではないだろうか。そして、われわれはみな、そのような先生と、人生のひとときでも接することができたということに、深い幸せを感じずにちがいない。

宮原 勇